



TITLE:

京大広報 No. 183

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 183. 京大広報 1979, 183: 981-992

ISSUE DATE:

1979-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209505>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 183

京都大学広報委員会



修復なった本部正門

さる7月20日から行なわれていた本部正門の修復工事が9月10日完了した。この正門は、旧第三高等中学校表門として明治26年に造立され、明治30年本学創設と共にその正門として引き継がれたもので、本学の歴史と由緒を伝える貴重な遺構である。

今回の修復工事により、門扉、通用口扉は創建時のものに倣って複製され、全体の姿は大正14年現本部本館竣工当時のものに復原された。

## 目次

京都大学市民講座の開催……………2	〈随想〉 外国の御客さん達
歴史的建築物保存調査専門委員会	故 名誉教授 石田 憲次…………8
第4次報告について……………3	計 報……………9
〈紹介〉 結核胸部疾患研究所附属病院……………6	〈資料〉 昭和53年度歳入・歳出決算書
〈保健コーナー〉 メランコリー……………6	および予備的経費配分実績……………10

## ＜大学の動き＞

## 京都大学市民講座の開催

本学では、財団法人京大会館楽友会の協力の下に、来る10月6日、13日、27日の3日にわたり広く一般市民を対象とする「京都大学市民講座」を

法経7番教室で開講する。

今回は、「人間を考える」をテーマに、人文・社会および自然の諸科学の領域にわたる講義が行なわれる。

講義日程は次のとおりで、講義時間はそれぞれ午後1時30分から5時までである。

日 程	講 義	講 師
第1日	開 講 あ い さ つ	総 長 岡 本 道 雄
10月6日(土)	人間はなぜ人間か — 人類学の立場から —	霊長類研究所 教授 江 原 昭 善
	心の障害と身体の病気 — 心因性めまい —	医学部 教授 檜 学
第2日	人 間 と 集 団 行 動 — 流言の心理 —	教養部 教授 木 下 富 雄
10月13日(土)	人間の行為と法的責任 — 愛と家庭と —	法学部 教授 前 田 達 明
第3日	人 間 と 人 工 知 能 — 理解のメカニズム —	工学部 教授 坂 井 利 之
10月27日(土)	人 間 と 仏 陀 — 空 の 思 想 —	文学部 教授 梶 山 雄 一

本学での公開講座は、近年では人文科学研究所、数理解析研究所等、部局単位で開催されてきているが、総合大学の特色を生かした京都大学としての公開講座は戦後初めての試みである。

なお、受講申込者は先着順に受け付け、定員

250名を予定していたが、9月8日には定員を超えたので、同日申込分について抽せんを行ない、290名をもって締切った。受付状況は次のとおりである。

職業 年令	公務員	会社員	教 員	自由業	自家営業	学 生	主 婦	無 職	その他	未記入	計	%
20才以下		1( 1)				8( 6)					9( 7)	3
20才以上	3( 1)	8( 7)		2( 2)	2( 2)	7( 5)	2( 2)	7( 6)	1	1	33(25)	12
30 "	10( 5)	10( 4)	2	2( 2)	5( 2)	1	18(18)	5( 4)			53(35)	18
40 "	7( 3)	14( 6)	4( 4)	1( 1)	6( 2)		35(35)	4( 4)		2( 2)	73(57)	25
50 "	7( 2)	6( 5)	2	1	3		13(13)	8( 7)		3( 3)	43(30)	15
60 "		10( 1)	3( 1)	4( 1)	3		2( 2)	21( 3)		1( 1)	44( 9)	15
70 "	1	1		1	6		1( 1)	11( 1)	2( 1)	1	24( 3)	8
未記入	1( 1)	2( 2)	1				2( 2)	1( 1)		4( 2)	11( 8)	4
計	29(12)	52(26)	12( 5)	11( 6)	25( 6)	16(11)	73(73)	57(26)	3( 1)	12( 8)	290 (174)	
%	10	18	4	4	9	5	25	20	1	4		100

( ) は女子で内数 男女比40 : 60



## 歴史的建築物保存調査専門委員会 第4次報告について

### 歴史的建築物保存調査専門委員会

本委員会は昭和49年12月に設置されてから今日まで既に14回の委員会を開催し、学内の歴史的建築物に関し調査研究を続けている。最近1か年間の活動のうち、医学部に現存する歴史的建築物の保存について本委員会第4次報告をまとめており、本年6月12日に開催された建築委員会へ提出し承認された。この第4次報告の概要を次に紹介し、学内諸氏の参考に供したい。

医学部構内には、明治32年に医科大学が創設された当初の歴史的建築物がなお多く現存している。本委員会では、これら医学部の歴史的建築物に注目し、その保存に関して昭和51年4月に医学部建築委員会委員諸氏と合同の懇談会を開催し、相互の意見を交換する機会を持った。医学部ではかねてより、研究室・実験室の新営計画が進められており、構内に散在する歴史的建築物の老朽化と補修に多くの問題をかかえ、新営計画の実施とも関連して、そのすべてを保存することが困難であるため、幾つかを選定して保存したいという意向がうかがえた。

昭和53年4月25日、本委員会へ医学部長から「医学部解剖学教室講堂等の歴史的建築物の保存について」の審議を依頼された。本委員会では委員会を開催し、医学部建築委員から、医学部にとって記念すべき歴史的建築物として次の4件を選定し、新しい建築との調和を考慮しかつ有効利用を図りたいとの趣旨説明があった。

すなわち、医学部案の保存選定建築物は

- |   |         |       |           |
|---|---------|-------|-----------|
| 1 | 解剖学教室講堂 | 明治35年 | 木造平家建階段教室 |
| 2 | 〃 実習室   | 明治34年 | 木造平家建     |
| 3 | 生理学教室本館 | 明治34年 | 煉瓦造二階建    |
| 4 | 〃 旧研究室  | 大正3年  | 煉瓦造平家建    |

である。

委員会の意見として、上記4件に加えて解剖学教室本館は西端部の標本室（煉瓦造二階建）も保

存する価値のあることを認め、医学部へ要望することにした。その理由として、解剖学教室本館の主体は木造二階建であるが、その西端に防火壁を介して所在する標本室は、道を隔てて西に隣接する生理学教室本館と建築形式が一致し、両者の左右対称的構成を建設当初に重視されていたことを思わせる。解剖学教室と生理学教室は医科大学創設時に最初に設立されており、当初の教室施設が長く今日まで持続されていることは他大学に例を見ない貴重な存在である。そして、両者の対称的構成は創設当初から今日まで、学内の歴史的景観保持のためにも欠かせない大きい要素をためている。木造二階建の本館主体の今後における保存が困難であるとすれば、その一部である標本室だけでも保存する価値がある。この追加1件は後日に医学部長から異存のない旨、委員会へ回答があった。

以上の審議経過を経て、本委員会として医学部構内に現存する歴史的建築物のうち、解剖学教室講堂他4件の建築物を、医学部の歴史ひいては本学の固有の歴史にとって記念すべき価値ある遺構として指定し、今後の有効利用を図り、かつ保存の面で万全の措置を構じられるよう建築委員会へ要望することとし、第4次報告としてまとめ答申した。

なお、第4次報告のうち、医学部歴史的建築物として選定保存が承認された5件の建築物の選定理由は次のとおりである。

#### 1 前文

本学医学部の前身である医科大学は明治32年9月11日に開設された。その施設は附属医院（現在の病院）を中心とする臨床部門と基礎医学部門に大きく二分して敷地の設定、建物の配置を計画し実施された。

基礎医学部門は病院部門の位置する構内とは近衛通をへだてて北に敷地を設定し、近衛通に面して南門、東一条より荒神口へ通じる古道に面して北門を配置し、この両門を結ぶ南北行道路で東西に二分した敷地に各教室を配置している。教室建築物の新築工事は病院本館・病舎の建設に少しおくれ、明治33年12月からはじめられ、最初に南門に最も近く、東に解剖学・病理解剖学教室、西に生理学・衛生学教室を配置することから着手され

た。翌34年11月にこの二教室の新築が竣工したが、解剖学講堂はおくれて明治35年に竣工した。

## 2 各個解説

### 2-1 解剖学教室本館 標本室 (建築延面積 187 m<sup>2</sup>)

創建時の当教室は本館、実習室、講堂、附属家等からなり講堂をのぞく建物群は明治33年12月に着手し、同34年11月15日に竣工しており、同工事を請負った棟梁三上吉兵衛の履歴書によると請負金額は4万4,928円であったことが知られる。木造本館を主体に、その北背面に2棟の実習室、西北に講堂を配置し、本館の南面中央に玄関車寄を突出させていた。近年、医学部図書館の新築に際して、この玄関車寄は本館と講堂をつなぐ渡廊下の中間西面へ移築されている。標本室は本館西端に接続してつくられ、本館とは防火壁で区切り、構造を煉瓦造二階建とし、屋根を寄棟造棧瓦葺につくる。道を介して西に所在する生理学教室本館と対称の位置を占めていて、構造、形式手法は両者共通しており、外観の統一を図っている。本館との接続箇所に一、二階の各出入口を設置し、鉄製防火戸を装置しており、また、本館に近い箇所の外壁に開口する窓は片開き鉄製扉を外側に装置しており、標本室のもつ性格に照応して防火上の工夫、配慮がなされている。この工夫はその後の病理学、法医学各教室の標本室に踏襲されている。

### 2-2 解剖学教室実習室 (建築面積 332 m<sup>2</sup>)

本館の北、東寄に所在する東西に長い棟をつくる木造平家建、屋根寄棟造棧瓦葺の建物で、西妻側に本館とむすぶ渡廊下への接続部をそなえ、それに面して入口戸口を設ける。外壁は下見板張で、内装は壁を漆喰塗大壁、床は板張、天井も板張につくる。この建物では顕微鏡実習に主に使用されるところから、南北二面の壁面を大きく開口し、上下二段の引違ガラス障子の連続した窓につくり、室内の採光に工夫をしている。なお、室内は一室で中間の間仕切がなく、また室内の中央部の床を一段高めた壇につくるなど特別な装置をそなえ、他に類例を見ない。

### 2-3 解剖学教室講堂 (建築面積 292 m<sup>2</sup>)

木造平家建、屋根寄棟造棧瓦葺で東面に下家廊下を附属する。外壁は下見板張ペンキ塗仕上、東

面をのぞく三面に上下二段の窓を配置し、上方の窓は上下げ窓、下方の窓は片開き窓につくる。屋内は階段教室につくられ、東面壁際に黒板、演壇、解剖台を装置し、これらをかこむ南、西、北の三方に聴講用の机、椅子を階段までに配置している。なお、聴講席階段の床下、北、西、南の三面壁寄りにコの字形平面の研究室がつくられる。そして西面中央にこの研究室への出入口をそなえる。講堂への出入口は東壁の黒板左右2か所に設けられる。建物の規模は東西行奥行11.8m、南北行巾21.8mの矩形平面で、天井高5.97m。なお、講堂類例は生理学、法医学各教室の講堂が現存しており、それらのうちでも本講堂は最大の規模をそなえる。本学医学部創設以来当講堂は医学教育・研究の中核施設として利用されてきた長い歴史と伝統をもっている。

### 2-4 生理学教室本館 (建築延面積 859 m<sup>2</sup>)

南門を入れて左手(西方)に生理学教室が所在し、明治34年に解剖学教室の新営と平行して本館、実習室、講堂が新築された。現在、本館と講堂および渡廊下が創建時のままのこされている。本館は南面してたち東西行43.6m、南北9.09mの矩形平面をもち、南面中央に玄関車寄、背面中央に主屋より突出して階段室を附属する。本館主屋と階段室は煉瓦造二階建、屋根寄棟造棧瓦葺、玄関車寄は木造平家建、屋根銅板瓦棒葺からなる。創設時に病院、基礎両部門の大半が木造であり、全館が煉瓦造の建物は当本館が唯一である。なお、明治35年造立の薬物、医化学両教室の各本館は、木骨煉瓦造であり簡略されていた。また、本学に現存する煉瓦造建物は、本部構内になお多く現存するが、その最古の遺構は旧第三高等学校創建時の物理実験場(現在、理学部機器分析センター、明治22年)であり、これについて旧理工科大学機械工学教室工場(明治28年、32年)、旧病理学・数学教室(現在、学生部)の一階部分(明治31年)および電気工学教室本館(明治32年、35年)の一階部分がある。とくに後二者は後世に二階を増築している。これらに比較すると、生理学教室本館は造立年代も上記のそれらに近く、さらに全館が二階建で玄関車寄、階段室もそなわり最も完備した規模と形式からなる貴重な遺構と言える。なお、基礎医学各教室の建物配置の点では法



医学教室にみる本館と講堂をつなぐ渡廊下に玄関棟を付設する手法がかつての病理学、薬物学および医化学各教室にも採用されていたが、当本館にみる玄関の手法はもう一つの方式を示すもので、旧眼科学教室（明治43年）、旧小児科学教室（明治44年）にうけつがれている。

当本館の外観上の特色は窓開口が比較的小さく、上下げ窓二連を一セットに組合わせるが、窓相互を煉瓦積柱で区分する手法を採用し、各窓は上部にキーストーンをもつ扇形アーチにつくっている。大正期に造立された煉瓦造建物（土木工学教室本館、大正6年）では窓開口を大きくとり、二連または三連の上下げ窓を一セットにつくり、各窓の区分は木造間柱をたて、一セット毎に大きくアーチをかける手法を見せている。また、外壁の中間を石製バンドを通して一階と二階を区分し、軒の出が小さく、石製軒蛇腹を石製持送りで支え、屋根面にはドーマー窓風の通風窓を間隔広く配置し、屋根を飾っている。

屋内は北側に廊下をとり、それに沿って大小諸室を配置しており、一、二階とも床組、天井、屋根小屋を木造にしている。階段室は玄関ホールに直結して当建物のうち最も見栄えのする箇所であるため、木造階段の配置、手摺、同親柱のデザインに装飾をほどこす余裕を見せている。

## 2-5 生理学教室旧研究室（現在、放射線生

物研究センター、建築面積 187 m<sup>2</sup>）

生理学教室本館の南に所在し、その入口を本館玄関にセンターを合わせて本館に対向してたつ。煉瓦造平家建、屋根寄棟造棧瓦葺、玄関は煉瓦造平家建、屋根寄棟造銅板瓦棒葺で主屋より少し突出する。本建物は、大正3年に造立されており、外壁、窓の手法に大正期の特色を示しており、小規模ではあるが、今日本学構内に現存する大正期の煉瓦造遺構のうち初期に属しており、本館との調和もとれていて本館とあわせて保存する価値をそなえている。

以上に列举した5件の建物はその沿革、規模、形式にうかがえるように、本学医学部の創設当初の遺構であり今日まで大きな改変をうけずに持続されてきた。そして、およそ80年にわたる医学部の栄光ある歴史と伝統を象徴する記念すべき建物群であり、本学の歴史さらにまた近代医学史あるいは近代建築史にも貢献するところ大であると考えられる。

参考資料：京都帝国大学一覧（明治30～43年）

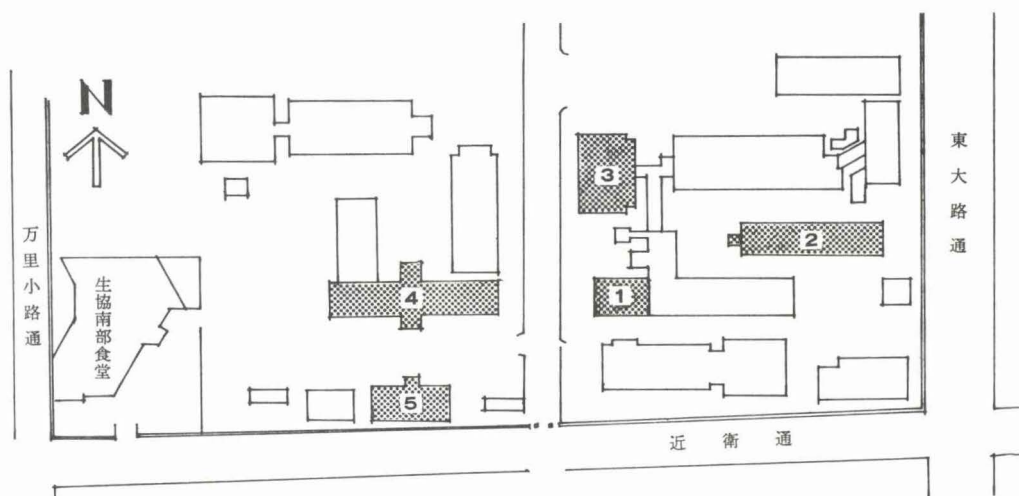
京都帝国大学史

京都大学七十年史

施設部保管建築設計図

京都大学建築八十年のあゆみ

棟梁三上吉兵衛履歴書



基礎医学構内建物配置図

病院地区構内

- 1 解剖学教室本館標本室
- 2 同上 実習室
- 3 同上 講堂

- 4 生理学教室本館
- 5 同上 旧研究室

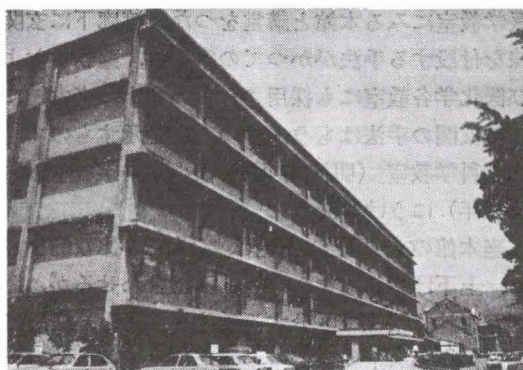
## ＜紹 介＞

## 結核胸部疾患研究所附属病院

昭和14年1月発足した京大結核研究会による研究所設立の努力がみのり、当時の最重要課題の一つであった結核問題の研究に向って京都大学結核研究所が設立されたのは昭和16年3月である。広い視野からの結核研究を目指した当研究所の特色は、さらに胸部疾患研究へと拡大され、基礎研究、臨床研究、実地診療の3者が一体となり患者の診療に当るといふ気風を生み出し、現在まで、次第に専門、細分化する医学研究の中でその特色を発揮している。すでに本研究所開設当初から診療部が付設せられ、内科、小児科、外科の3診療科が外来ならびに入院患者（143床）をもって診療を開始している。

昭和39年4月研究所附属施設として附属病院が認められてから、今年で16年目に当たっている。研究所設立当初、物理的治療法研究部、化学的治療法研究部、手術的治療研究部、特異性研究部（年令、臓器特異性研究）として発足した臨床関係の4部門は、昭和38年4月、内科学第1部門（主任教授：内藤益一）、内科学第2部門（主任教授：辻周介）、胸部外科学部門（主任教授：長石忠三）、と新しく改称された。これら3部門に対応する第1内科診療科、第2内科診療科、外科診療科の3診療科も昭和41年4月までに認められ、同年度予算で病床数も160床に増加し、基礎研究部門であった病理学部、細菌血清学部と相まって結核研究に多大の寄与をなしたことは周知のことである。

臨床医学系として関連のある2、3の業績を概観すると、内科学第1部の肺結核の感染、発生および進展の問題の一つとしての外因性再感染の意義づけ、ストレプトマイシンの登場を皮切りに次々と開発された抗結核薬の投与法の検討に加えそれに派生してきた耐性菌感染症の広範な研究、内科学第2部の結核および諸種胸部疾患のアレルギー、免疫学的研究、トランスファー・ファクター



に関する種々の新知見があり、胸部外科学部の空洞切開術の確立をはじめとする広範な手術々式の臨床応用は臨床肺生理学部の特に肺循環に焦点を当てた広範な研究成果によって稔り豊かなものになっている。さらに肺の微細構造に関する研究は各種肺疾患における肺電顕像の解明となって大きな成果をあげている。

近年における結核症の減少と共に、本附属病院入院患者の疾患別内訳も大巾に変化し、非結核性肺疾患、なかんずく肺癌、種々の呼吸器感染症、肺線維症、免疫性肺疾患、閉塞性肺疾患等が増加し新たな課題が山積している。昭和42年3月附属病院新築完成につづいて同年6月「結核研究所」は「結核胸部疾患研究所」と改称され、昭和46年4月には臨床肺生理学部門の開設、さらに50年10月には放射線診療科が設置されると共に、昭和53年10月に認められた検査部が加わり、放射線部と共に中央診療施設として発足している。

現在、所長：前川暢夫教授（内科学第1部）、病院長：佐川弥之助教授（臨床肺生理学部）、大島駿作教授（内科学第2部）、寺松孝教授（胸部外科学部）、の下に教官21名、医員、研修医21名が診療に従事している。なお放射線外来、喘息外来、慢性せき・たん外来、気管支拡張外来、サルコイドーシス・肺線維症外来、漏斗胸外来がそれぞれ特色のある診療活動を実施していることも付記したい。（結核胸部疾患研究所）

## 保健コーナー

## メランコリー

メランコリーとは黒胆汁をあらわす言葉で、ギ

リシャの体液理論に端を発し、気質あるいは精神の病いの名になった。しかし西欧では、情念あるいは感情の状態をあらわす言葉となって広く一般に用いられ、文学や芸術の領域にも現われている



(有名な Dührer のメランコリアなど)。

医学の世界でのメランコリー概念は、時代によって動揺しており、広く狂気一般を示していた時期や、打ちひしがれた活気のない、しかし発熱を伴わない狂気をあらわしていた時期 (17世紀)、判断の誤りが或る一つの対象に限られた部分的狂気をあらわしていた時期 (18世紀) などを経て、19世紀の終りから今世紀の始めにかけては、ドイツの精神科医 E. Kraepelin が精神分裂病と対比させて、情動性・循環性の精神病として整理した。Kraepelin の仕事も、いくつかの経過を経て、同じく狂気をあらわす言葉であったマニーと合わせて躁うつ病 (manisch-depressives Irresein) として記載されたのが 1899 年の彼の教科書であり、明治維新にドイツ精神医学の輸入されたわが国の精神医学界で、この概念は長く用いられた。フランス学派では、メランコリーとうつ病を区別して用いている人もあるが、わが国では大体メランコリーと言えぱうつ、ないしうつ病と考えてよい。

Kraepelin の概念は、Kretschmer の病前性格の研究、つまり精神分裂病一分裂気質—類分裂気質、躁うつ病—循環気質—類循環気質という正常人への傾斜を認めようとする研究とも相まって、専門家以外の人たちにも、かなりよく知られている。ところが、Kraepelin の整理があまりにも見事でありすぎた故か、あるいは時代の推移による病像の変化であるのか、少なくともここ数十年、種々の名称で呼ばれる単相性 (一回だけの病期の) うつ病が次々に記載されるようになった。曰く、引越しうつ病、昇進うつ病、日曜うつ病、仮面うつ病等々。これに在来から専門家の間で用いられていた神経症性うつ病、更年期うつ病、心因性うつ病、抑うつ神経症等々を加えると枚挙にいとまがない。

以前本学保健管理センターの精神科医であった笠原は、名市大の木村と共にこれら多様なうつ病の整理分類を試みている (1975)。両氏の分類は病前性格—発病状況—病像—治療への反応—経過をセットとしてまとめたこと、躁状態を心的水準としてはうつ状態より低い水準のものと見ていこうとしたところに特徴がある。ここで目につくことは、多くの単相性うつ病が第一型としてまとめ

られていることで、その病前性格が循環気質ではなく、下田・平沢のいう執着性格 (仕事熱心、凝り性、徹底的、正直、几帳面、強い正義感、義務責任感、感情の持続的緊張) ないし Tellenbach のいうメランコリー親和型性格 (対他的秩序愛、すなわち対人関係の秩序の中で生きるのを好む傾向) とされていることである。発病契機として転動、昇任、家族成員の移動、身体疾患の罹患、負担の急激な増加ないし軽減、出産、居住地の移動と改変、愛着する事物あるいは財産の喪失などがあげられている。発病年齢は 20 歳、30 歳代にも稀でないが、どちらかといえば中年から初老期に多いという。

これらの記載からすぐ気づくように、この種のうつ病にかかる人は発病前の社会適応が平均以上に良好である。人づきあいもよく、仕事にも真面目で、あんな人が、という人たちがいつの間にかうつ病にかかっていることが多い (逆に、あれほど真面目な人ならこそ、とあとで納得させられることもある)。しかも、この人たちはうつ状態に陥り、作業水準が落ちてきてもなおかつ真面目、几帳面である。それまでと変らぬ徹底性や責任感を維持しようとする。自他ともに気づかず、早朝覚醒型の不眠、食欲低下、性欲減退、頭重、口渴、便秘、心窩部圧迫感、体重減少などで内科医を訪れることが多い。これが仮面うつ病と言われる状態である。身体疾患の外面を呈しながら、身体的には何ら異状所見は認められない。内科医の目を逃れるうちに不安焦躁、自責、内的抑止 (外的にはしばしば軽度——そのために周囲の人に見のがされることが多い)、日内変動 (多くは朝が不調で夕方から夜にかけては好転する) などの精神症状が強くなる。自他ともにうつ病であることに気づかないこと、年令的に家族の精神的、経済的支柱になっている場合が多いなどの状況から、仕事や対人交渉も減らず、悪循環的に重篤化し、自殺念慮をいだくことも多い。

幸いなことには、治療意欲も高く、抗うつ剤もよく奏効するので、一旦専門医を訪れるようになると経過は概して良好である。それでも、医師の手を離れるまで 3～6 か月を要する。反復傾向は従来いわれた躁うつ病より少ないが、経過中あるいは治療の途上で、一過性に軽い躁状態を呈する









## 〈資 料〉

## 昭和53年度歳入・歳出決算書および予備的経費配分実績

## I. 昭和53年度 歳 入 決 算 書

文部省所管国立学校特別会計

京 都 大 学

款 項 目	歳入予算額 円	収納済歳入額 円	差引増△減額 円	備 考
附 属 病 院 収 入				
附 属 病 院 収 入				
附 属 病 院 収 入	6,821,451,000	6,853,315,536	31,864,536	
授業料及入学検定料				
授業料及入学検定料	1,617,290,000	1,526,898,200	△ 90,391,800	
授 業 料	1,263,318,000	1,230,498,700	△ 32,819,300	
入 学 料 及 検 定 料	353,532,000	295,987,500	△ 57,544,500	
講 習 料	440,000	412,000	△ 28,000	
学校財産処分収入				
学校財産処分収入				
学校財産処分収入	0	1,205,258	1,205,258	原子炉実験所敷地の一部売払等
雑 収 入				
雑 収 入	860,369,000	880,510,247	20,141,247	
学 校 財 産 貸 付 料	16,448,000	17,392,656	944,656	
公 務 員 宿 舎 貸 付 料	31,587,000	30,691,423	△ 895,577	
版 権 及 特 許 権 等 収 入	654,000	661,950	7,950	
寄 宿 料	1,314,000	582,400	△ 731,600	
入 場 料 等 収 入	31,765,000	21,217,660	△ 10,547,340	
用 途 指 定 寄 付 金 受 入	446,970,000	446,965,663	△ 4,337	
受 託 調 査 試 験 等 収 入	221,300,000	224,056,900	2,756,900	
弁 償 及 違 約 金	242,000	255,961	13,961	
農 場 及 演 習 林 収 入	38,571,000	38,845,712	274,712	
刊 行 物 等 売 払 代	14,265,000	17,353,558	3,088,558	文献複写等の売払件数の増加
不 用 物 品 売 払 代	12,706,000	15,199,116	2,493,116	
労 働 保 険 料 被 保 険 者 負 担 金	337,000	366,763	29,763	
雑 収 入	44,210,000	66,920,485	22,710,485	計算機使用料の増加等
合 計	9,299,110,000	9,261,929,241	△ 37,180,759	

## II. 昭和53年度 歳 出 決 算 書

文部省所管国立学校特別会計

京 都 大 学

項 目	歳出予算額 円	支出済歳出額 円	不 用 額 円	備 考
国 立 学 校	25,980,519,000	25,960,402,901	20,116,099	
職 員 基 本 給	10,149,140,000	10,146,077,945	3,062,055	
職 員 諸 手 当	4,626,210,000	4,622,143,224	4,066,776	
超 過 勤 務 手 当	310,463,000	310,461,052	1,948	
非 常 勤 職 員 手 当	181,488,000	178,473,020	3,014,980	
休 職 者 給 与	59,887,000	59,744,847	142,153	
国 際 機 関 等 派 遣 職 員 給 与	3,045,000	3,044,234	766	
公 務 災 害 補 償 費	43,878,000	43,877,550	450	
退 職 手 当	1,213,154,000	1,213,151,789	2,211	
児 童 手 当	10,632,000	10,563,000	69,000	
諸 謝 金	35,706,000	32,592,055	3,113,945	

項 目	歳出予算額	支出済歳出額	不 用 額	備 考
	円	円	円	
受 託 研 究 謝 金	1,874,000	1,873,450	550	
外国人教師等給与	66,211,000	62,426,268	3,784,732	
海外派遣留学生給与	4,890,000	4,890,000	0	
職 員 旅 費	196,689,000	196,688,700	300	
受 託 研 究 旅 費	21,326,000	21,326,000	0	
赴 任 旅 費	21,369,000	21,337,881	31,119	
外 国 旅 費	13,832,000	13,832,000	0	
在外研究員旅費	81,884,000	81,879,925	4,075	
講 師 等 旅 費	34,579,000	34,578,988	12	
海外派遣留学生旅費	2,363,000	1,984,400	378,600	
外国人教師等招へい 及 帰 国 旅 費	4,076,000	3,408,798	667,202	
校 費	7,461,199,000	7,461,199,000	0	
受 託 研 究 費	145,426,000	145,426,000	0	
受 託 研 究 員 費	13,422,000	13,422,000	0	
土 地 建 物 借 料	15,581,000	15,047,934	533,066	
電子計算機等借料	723,042,000	721,882,753	1,159,247	
各 所 修 繕	74,989,000	74,989,000	0	
自 動 車 重 量 税	2,558,000	2,480,500	77,500	
奨 学 交 付 金	446,970,000	446,965,663	4,337	
演 習 所 在 市 町 村 交 付 金	479,000	479,000	0	
国 有 資 産 所 在 市 町 村 交 付 金	11,890,000	11,889,910	90	
交 際 費	350,000	350,000	0	
賠償償還及払戻金	1,917,000	1,916,015	985	
大 学 附 属 病 院	9,857,723,000	9,849,305,787	8,417,213	
職 員 基 本 給	2,671,972,000	2,671,560,293	411,707	
職 員 諸 手 当	1,453,849,000	1,453,848,198	802	
超 過 勤 務 手 当	397,127,000	397,126,992	8	
非 常 勤 職 員 手 当	394,543,000	394,540,656	2,344	
育 児 休 業 給	619,000	606,656	12,344	
児 童 手 当	1,579,000	1,569,000	10,000	
諸 謝 金	100,000	100,000	0	
職 員 旅 費	13,101,000	13,101,000	0	
校 費	1,246,726,000	1,246,726,000	0	
受 託 研 修 費	2,091,000	2,091,000	0	
医 療 費	2,683,629,000	2,683,629,000	0	
医 療 機 器 整 備 費	251,840,000	251,840,000	0	
学 用 患 者 費	276,963,000	276,963,000	0	
電子計算機等借料	78,936,000	78,936,000	0	
患 者 食 糧 費	384,572,000	376,592,392	7,979,608	
自 動 車 重 量 税	76,000	75,600	400	
研 究 所	7,827,487,000	7,823,859,727	3,627,273	
職 員 基 本 給	2,951,490,000	2,949,975,942	1,514,058	
職 員 諸 手 当	1,340,930,000	1,339,160,837	1,769,163	
超 過 勤 務 手 当	177,062,000	177,061,731	269	
非 常 勤 職 員 手 当	6,524,000	6,523,500	500	
児 童 手 当	4,130,000	4,130,000	0	



項 目	歳出予算額	支出済歳出額	不 用 額	備 考
諸 謝 金	21,957,000	21,953,000	4,000	
外国人教師等給与	12,812,000	12,492,530	319,470	
職 員 旅 費	87,768,000	87,768,000	0	
受託研究旅費	1,993,000	1,993,000	0	
外 国 旅 費	4,697,000	4,697,000	0	
研究員等旅費	107,930,000	107,930,000	0	
外国人教師等招へい 及 帰 国 旅 費	3,985,000	3,984,692	308	
校 費	2,967,938,000	2,967,938,000	0	
受託研究費	20,591,000	20,591,000	0	
土地建物借料	14,394,000	14,393,695	305	
電子計算機等借料	102,058,000	102,046,000	12,000	
自動車重量税	1,228,000	1,220,800	7,200	
施設整備費	6,413,410,000	5,161,162,281	(1,252,247,000) 719	
設計監理謝金	27,006,000	27,006,000	0	
施設施工旅費	11,919,000	11,527,000	( 392,000)	上段( )書は工事費の翌年度繰 越分である
施設施工庁費	5,576,000	5,576,000	0	
施設整備費	6,368,745,000	5,116,889,937	(1,251,855,000) 63	〃
不動産購入費	164,000	163,344	656	
合 計	50,079,139,000	48,794,730,696	(1,252,247,000) 32,161,304	

## Ⅲ. 昭和53年度 予備的経費配分実績

(職員旅費)

区 分	金 額	区 分	金 額
1. 予 算 額	18,748	(2) 特 別 事 業 旅 費	2,092
2. 部局長会議決定による配分額	18,748	(3) 入 学 試 験 経 費	794
(1) 会 議 出 席 旅 費	128	(4) 各 部 局 へ の 補 足	15,734

(校 費)

区 分	金 額	区 分	金 額
1. 予 算 額	175,627	課外活動施設等整備	4,181
2. 部局長会議決定による配分額	175,627	学生懇話室紀要刊行費	500
(1) 教 育 研 究 経 費	69,587	(3) 入 学 試 験 経 費	
教育研究用図書整備	12,780	入学試験経費補足	13,123
教育研究用事業費	35,016	(4) 本 部 運 営 費	29,173
教育研究用施設整備	10,450	(5) 管 理 運 営 費	57,879
大学院学生研究条件改善費	11,341	庁舎等管理運営費	29,181
(2) 厚 生 補 導 費	5,865	施設等整備	28,698
学 生 寮 整 備	1,184		